

広島文教国文往来

横山邦治

○本学の国文学科書道専修生は、二・三年次生が中国金石研修旅行を夏休暇中に十日間ばかり実施することが隔年の恒例となつています。その研修成果は、旅行終了後に冊子にまとめて刊行されていますので、これまでの研修旅行の内容についてはそれらの冊子を参照して下さいなのですが、今回の第四回の中国金石研修旅行には少し研修目的に変更がありました、中国入国の第一歩を大連に印するというのがそれです。今までは北京に到着して西安に向うという旅程であつたようですが、まず大連に行くというのです。これは大連外国語学院（日本における外大で、日本語教育では中国で一番歴史のある大学のようでもあります。）が本学の姉妹校であり、この学

院を表敬訪問するという重大なお役目があり、それを基本として全体の計画が樹てられたのです。日比野先生が、窓口になって下さり、学院の徐甲申副院長先生と連絡をとりながら周到な訪問計画を作成して下さいました。当然のこと、武田学千学長先生が团长として引率されるはずであつたのですが、アメリカのケント大学との姉妹縁組のことで訪米されなくてはならなくなり、あれやこれやで私がシャシャリ出て中国訪問をさせていたただいたのでした。私は以前から大連を訪問したいという希望を抱いていました、それは中村幸彦先生のお話しであつたのですが、昔重友毅先生と学会で同宿されていたころのこと、戦前に重友先生は大連の高専の教授をしておられ

たのだそうで、その思い出話として高専の図書館に沢山の和本があつて、読本も初刷の善本がずい分あつたとのこと、それらの本が戦火にも遭わず存在していたら是非見てみたいと常々願つていたのでした。徐先生が訪日されていた時に、そんな本があるかどうか調査したいとは申し上げていたのでした。ともあれ書道専修の日比野先生の計画に便乗して、訪中することとなつたのです。

○出発は七月三十一日（日曜日）で、広島駅へ七時三十分ごろ集合ということでしたが、三名遅刻でした。三十九名という団体ともなると一糸乱れずということは不可能なのでしょう。その内の二名は新幹線のひかり一三一号には何とか間に合いましたが、一名は寝過しで寝呆けていたため駄目。福岡空港の出発が十二時十分で少し余裕がありましたので、それには何とか追い付いてきました。前夜興奮して寝つかれず、夜明けになつてウトウトとしている間に寝過したというのです、よくある失敗で気持は大変よく判るので、飛行機に間に合つてよかつたネと言うことになつたのですが、統率者の日比野先生は大分胃散を必

要とする精神的ストレスを感じておられたようでありませう。団体であるせいカスポーツの検査なども簡単で、福岡空港から一足飛びに大連、一時間半の飛行です。雲海の上で下界はあまり見ることができません、黄海の上なのか広漠たる海波がチラリチラリと見えるだけで大連の周水子空港着。平成六年の猛暑は日本と全く同じです、空港がまだ十分に整備されていないのでしょうか、あちらこちらで土木作業中の人たちが群がっていて、時間的には休憩中なのでしょうが筋骨たくましく短パン一丁で上半身裸の姿で悠々とノンビリとしています。発展途上国の底深い活力というべきものを感じます。入国チェックも終つてガランという感じの空港入口に出ていきますと、徐先生を始め数名の学院関係者が出迎えて下さっていて、荷物運びの手伝いまでして下さる、その一挙手一投足に学院の歓迎の気持が響いてくるのでした。空港から大連滞在中宿泊の大連南山賓館に直行、そのホテルまでは大連市街を横断することになるのですが、ロシア風と日本植民地風の多様な形式の建物が混在して、それらの古い建物がドシド

シ破壊されていつている不思議な都市です。破壊された跡に次々と新しい建造物が姿を現わしているのですが、外枠だけを見ても、極めて近代的工法と資材を使用している超高層ビルもあれば、竹を割って組み立てた枠組の中にコンクリートを流し込んである五・六階建の建物もあるという具合で、外観も工法も千差万別、火事場の跡のような凄まじさの建築合戦最中でありませう。中国の開放経済政策の功罪がいかなるものか専門外で判りませんが、日本における数十年前の朝鮮戦争による特需景気の時のような活気と乱雑さを感じられるのでした。移動用の貸切りバスも一寸使い古しという感じで、運転はスイスイと上手ですが、混雑する群衆の中をあたりかまわず突進する有様で、一寸最初は生きた心地もしませんでした。

○一休みの後で大連外国語学院を早速に表敬訪問、国際交流担当の孫吉田副院長先生の出迎えてました。日本の植民地時代は大連神社が祭祀されていたところとか、一寸小高い丘陵地に様々な建築物のある大きな大学です。岡に登る道は細く、両側に屋台のような飲食店

とか露店とかが並んでいて、学生が中心でしょうが雑然と沢山の人が群れています、その群衆の中をスルリスルリとバスは通り抜けていきます。この群衆とバスとの状況は、信号が非常に少いこととともに瀋陽でも天津でも北京でも同じことで、当方は肝を冷やすことではありません。ともあれ初日は表敬訪問ですから、武田学長の信書とかお土産をお渡しして、市内観光、夕刻は学院の招待で学院内ホールで晚餐会という順序です。市内観光と申しましてもバスで通過する窓外の風物を片言の日本語で説明して下さるだけなので、あれがロシア時代の建物か、これが日本植民地時代の大和ホテルかと認識するだけ、ガツチリした洋風建築は残されているようですが、全てがリストラ時代に入っているようで、そのリストラが未完成ですから混乱は極まっています。

老虎灘公園という海濱の公園に連れて行かれたのですが、中国好みかロシア好みか存じませんが巨大な虎像が鎮座、スマートな服装の中国の人々が沢山散策したり商売をしたりしているだけでなく、観光客風の外国人の姿も数多く見かけます。突然に、港に停泊してい

る観光用艦船の上に仕掛けられている爆竹がけたたましい爆発音を発し始めました。私も日本人はただただ吃驚するだけです。中国の人はこうした爆発音を好むようです。観光客歓迎のつもりなのでしょうが。

○夕刻、大連外国語学院再訪による歓迎パーティは、孫副院長先生の日中友好に基盤を置いた歓迎のあいさつによつて始まりましたが、中国風料理というのは山盛りで次から次に出て参りますし、強いお酒も出て参りまして大変盛り上りました。最初は借りてきた猫のようであつた本学の学生も、ビールの一気呑みを始めましたら、学院の先生も学生さんも大よろこびで、日本の学生のビール呑みの風俗が中国にも伝染したようであります。付け焼刃に近い中国語も何とか通じ合えるところがあるようで、外国語学院の学生さんは流暢な日本語を話せる人も多くて、それぞれの立場で日中友好の実を挙げたようであります。若い人はさすがであります、外国語音痴の私は、終始借りてきた猫でありましたけれど。南山賓館での大連第一夜は、日本並みにむし暑くはありましたけれど、上機嫌で快適に過ごす

ことが出来たのでした。

○大連での第二日目は、午前中、外国語学院における筆会行事です。昨夜歓迎パーティのあつた部屋に本学と大連外国語学院及び大連師範大学の学生諸君の書作品が展示されており、その展示品に見守られる形で筆会が催されました。日中双方の選拔軍によつて交互に日頃習練した手並を披露するので、緊張の中にも友好の雰囲気になった筆会になりました。大連師範大学名誉院長で現代中国書道界の第一人者である于植元先生が、最後に筆を執つて「結翰墨縁」と書かれました。柔の中に鮮烈な剛さのある書の線でした。現代中国の苦難の歴史の中で耐え抜いて、自からの信念を保持し続けられた精神力を反映しているのでしょう。于先生の書跡は、二つの別室に展示してあり、観る者に書の在り様について感銘を与え続けているようでした。筆会の後で于先生の通訳付き特別講義がありました、メモ用紙一枚持たないで中国の書の史と技と心とを語られるのです。聴講する者一同、蕭然と襟を正して聞き入ったことです、中国の長久の書の流れが于先生の血肉として血脈の

ごとくに顕現しているのでしょうか。本学の書道専修の学生諸君にとつても、実り多い企画であつたのです。

○昼食後は市内観光、最初に大連で一番の繁華街で自由行動です。バスで連れられて行くのですから、そこが大連のどのあたりで何と云うところか判りませんが、ここもクラッシュ・アンド・ビルドであります。日本で申せば地上げ屋でしか出来ないような町の真中が集中的に破壊されて平地にされており、土地が私有制でないから可能なのでしょうか、そこに何か巨大な建物が出現しようとしているのです、商店街のドマンナカなのですから驚きます。大勢の人が群をなして商品を買って求めています、豊かな商品です、共産主義体制下のソ連での買物行列の噂から見ると、中国の共産主義体制下の消費経済は豊かと言えるのでしょうか。大連も今夏は暑いのです、町行く人たちが路上で売られているジュースやらコーラなどをラッパ呑みをしています。自身は買物をするつもりもなく、第一言葉が判らないのですからそんなことも出来ないのです、一通り町並みを見物した後は喉の渴きを

癒すために喫茶店を探しました。何分にもジュースのラッパ呑みは出来ませんので喫茶店を探したのですが、全く見当らないのです。日本でしたら一寸した町中には大ていあるはずの喫茶店がないのです、レストランとか食堂らしきは沢山あるようなのですが、一寸休憩しながら喉の渴きをいやすために一杯のコーヒーをとる場所がないのです。欧米のことは全く知りませんが、パリなどではカフェテラスなど申すものがあるそうですし、江戸の御代でも茶店など申すものがあつたそうで、庶民が安あがり一寸一休みしてお喋りする場所があるのが当り前と思つていたのですが、そうした場所がないのです。後で聞きますと日本資本の喫茶店が目抜き通りに一軒あつたのだそうですが、万事高価で庶民の店ということではなさそうです。喫茶店文化というものはあるのかどうか知りませんが、文化が人間の語り合いの中で醸成されていくものだとすると、喫茶店がないというのは文化の質に何か異質なものがあるのかなと思つたことでした。王侯貴族のための食文化は大変発達しているようなのですが、私どもが若い

時代に談論風発した居酒屋風のもの、そして今や老化現象が生じてコーヒー一杯で会話を楽しむ喫茶店風のものが多いというのは、行きずりの垣間見だけの観察で云々することではないのでしようが、何か文化の質の違いについて考えさせられたことであります。

○学生諸君はこの後も市内観光でありましたが、私どもは徐先生にお願ひして大連市図書館の見学をさせていただきます。私の希望していた戦前からの大学の図書館は休み中ということで見学出来ませんでした。大連市図書館は見学させていただけたのでした。徐先生が副館長の汪孝海先生と親しく紹介して下さり、極めて友好的な雰囲気のもとに見学を許可して下さつたのでした。停電中でエレベーターが動かず、冷房の効かない館内を書庫のある五階までテクテク登っていくのは大変でしたが、五階から八階まである書庫内を見学することが出来ました。ここには旧満鉄の蔵書・資料が完全に収蔵されているようで、書籍二十万冊は五階から七階までの書庫に収蔵されており、諸資料は八階の書庫内に収蔵されているようです。停電で書庫内の電

球が発光せず窓明りだけの薄暗い中を、五階から七階まで一応は隅から隅まで小走りで見廻つたのですが、満鉄という会社の満蒙から北支にかけて開発するという日本帝国の国策に従つた蒐書であるらしく、満蒙・北支の地書やら歴史やらが組織的に集められているのです。しかしそれだけではなく、昭和二十年までに日本で出版された書物も大量に収蔵されているのです、敗戦の時の書物の亡霊がここに佇んでいるという感じさえするほどでした。江戸期の板本はないものかと目を皿のようにして走つたのですが、それはあまりありませんようでしたが、とにかく多角的に多様に収書されているようでした。那須宣晴氏、この方は広島大連会―広島在住で戦前の大連に住んでおられた大連ファンで結成されている会です―のお世話をしておられる方で、本学が大連外国語学院と姉妹縁組を結んだ時に、何かと積極的な働きをして下さつた方だと武田学長先生から聞いたことがあります、その那須さんから頂戴した『思い出の大連』北川幸彦著私家版によりますと、北川氏の父上が満鉄本社の真正面にあつた大連図書館の最

高責任者であったそうで、これは伝聞ですが敗戦時に軍から処分するよう命令された書物を守り通されたのだそうです、一時ソ連に持ち去られたという噂も流れたようですが、ともかく現在は大連市図書館にソックリソノママに保存されているのです。素敵なことですが、一応整理はされているとのことですが、目録はもちろん出来ておらず、必ずしも十分に活用できていないようであります。日中共同による調査研究が必須のことであろうと思いましたが、日本語が十分判る人が調査に参加する必要があるので。八階の書庫、即ち資料類が収蔵されているところには入庫できず、覗き見るだけに終わりました、新聞類とか軸物類とかというもののようでした。とにかく時間が無いのです、腰を落ち付けて歳月をかけて調査研究したいものであります。後髪を引かれる思いで大連市図書館を後にしたことです、重友先生が語られたという江戸の板本も、運よく今も大連か旅順のどこかで生き残っているのではないかと希望的観測をしてみたくなるのです。

○大連の中央に城塞のような新築の商店街が

あり、古物商と土産物屋とが集っている場所に案内されました。興味がほとんどないので巡覧しただけでしたが、日本の書幅や古書も少しではありましたが売られていました。

戦前に日本から持ち出された書画骨董も混じているのかも知れないと思いつながら、価値が判らずパスでありました。安あがりであることは判っていても、何かを買い込みたいという衝動が湧いてこないのです、これも老化現象でありましょうか。大連第二夜の夕食は、大連外国語学院の方々を招待しての宴会です、大連市内第一級の食堂のようでしたが、何というお店であったのでしょうか記憶しておりません。この宴会で徐先生が日中友好の重要さと将来性についての見通しを述べられましたが、徐先生の思考力の力強さを反映して極めて格調の高いお話しでした。一方的な主義主張にとらわれない、自由で広やかな発想による思考の表明のように思いました。本学の学生も答礼したのでしたが、タドタドしき中国語も拍手喝采でありました。日中友好の実を挙げた宴であったと言えるでしょう、別の宴席のお客さんから一寸気味悪く味のよいた

べものが献呈されておりまして、サソリか何かの油いためでしたが、中国の食文化の多彩さを垣間見たことでした。

○八月二日（火曜日）、快晴猛暑です。南山賓館で徐先生たちの見送りを受けて、午前中は大連市内観光、と申しましてもバスでアチコチですであまり印象に残るものとしてありません、星海公園というのでしょうか小高い公園の丘の上からバスの窓越しに眺めた渤海湾の美しい海の色が印象的でした。大連市内は火事場の後のような混乱ぶりです、「北海の真珠」と呼ばれたという美しさは感じられませんでした、この渤海湾の自然の美しさが残っている限り、経済再建のための破壊と再生の槌音が止んだ後の大連は、再び「北海の真珠」としての美しさでお目見えすることでありましょう。人波の中を大連駅へ向い、十三時四十分発の遼寧一号列車で瀋陽に向うこととなります。指定席でしたが、満員、ゆつたり向い会つての四人座席で中央にテーブルがあり、熱いお湯が座席に配られています。生水を飲んではいけないという注意が出発前にありましたが、中国の人も同じことで、十

分に熱気を通した水分しか摂取しないのだなと今更のように思うことです。大連から瀋陽まで停車なしです、満州の大平原に入れば当然のことですが、遼東半島の山脈を縫って走る時もトンネルが一つもない鉄道です。トンネルだらけの日本のJRでは信じられない線路であります。

○ここまで書いて息切れがしてきました、この後、瀋陽・天津・北京と経由して帰国したのですが、その赤ゲット見聞録を記すつもりだったのですが、目下気力不全症にて筆が進みません。全く私的な身情的事情なのですが、五月の末ぐらいから十四年前の手術の際の輸血による血清肝炎、当時は非A非B型肝炎と申しておりましたが、今ではC型ウイルス性肝炎であることが明らかになりました、その肝炎の増悪期に入り、中国旅行はもちろん恒例のおくのほそ道行脚も中止しようかと考えたのです。ところが主治医に相談したところ、おくのほそ道行脚が終って入院加療と申し渡され、えゝままよと旅立った次第なのです。おくのほそ道行脚も伊達の大木戸から平泉まで踏破、帰広直後の九月五日に広島の日赤に

入院、肝臓の内視鏡検査の結果、いまだ肝硬変に至らずということでインターフェロンβ (IFNβ) 投与ということになりました。IFN注射は副作用があることで有名なのですが、私の場合はそれほど激しい副作用とてなく、注射開始十日ばかりで退院という運びとなりました。検査時にはGOT・GPTという肝炎特有の数値(トランスアミナーゼ値)も下降気味となっていて、主治医もIFN注射をすべきかどうか考えたようですが、とにかく切腹までして検査したのでからIFNβ注射に踏み切ったようです。当初二ヶ月間の静脈注射と聞いていたのですが、二ヶ月間は毎日の通院注射だったので、結果的には目下四ヶ月目の隔日投与であります。良好な結果が生まれていないようなのです、GOT・GPTは正常値となり、抗体値も三百三十一より二十へと激減しているらしいのですが、マイナスに至らないらしいのです。ウイルス数がマイナスにならないとすぐに激増しますので、元の木阿弥であるわけです。さていかが相なりますやら、今後の体調が課題であります、それよりは副作用があまりな

いと思っていたIFN注射の実質的副作用がいくらか生じていまして、気力不全症という次第。関節の節々が痛かったり、頭が重くなったりという程度なのですが、何となく気力不全症なのであります。こうした雑文三・四十枚ですと片手間でせいぜい一週間か長くて十日間もあれば書き終えていたのですが、この原稿はもう二ヶ月も枕元に置いてあるのです。置いてあるだけで書き続ける気力が湧かないのです。締切を大幅に越えていることもあり、ますので、ここらあたりで次回にゆずり、IFN注射完了後の気力回復時に書き続けましょう。果して書き続ける気力が湧いてきまそうか、細かい限りではあります。平成七年乙亥の年の平安を祈ることであります。

○武田学千学長先生所蔵の井伏鱒二の書簡のことを先号に記しました。ノーベル文学賞を受けた大江健三郎も敬すべき作家として推奨する井伏鱒二(井伏さんの祈りとリアリズム)別冊文芸春秋第二一〇号)ですから、今後一層何かと話題になるのでしょうが、早速に滋賀大学の寺横武夫氏から反応あり、兵庫教育大学の前田貞昭氏が詳細な「井伏鱒二著

作年表稿」を作成中で、昭和十九年六月の「家の光」二〇巻六号に「川谷ハル女―現地報告―」という文章あることを紹介され、また昭和十八年二月号の「家の光」にも井伏の文章があるらしいと古書通信添付で知らせて下さいました。これで戦前から「家の光」に井伏は関係があったということになるのですが、昭和三十一年ごろのことは未解明のことです。調査していくと色々なことが判ってくることです。それにしてもほんの三十数年前のことでも、かくのごとくに空々漠々としていて事実を的確に把握するためには手間隙のかかることでもあります。江戸三百年の一昔以前の文化を調べているつもりのものでありますが、果してどの程度に本当のことが判っているのかと心細いことでもあります。今一度自分自身の仕事を見直してみたいと思うことですが、果して時間的に体力的に能力的にその余裕がありますでしょうか、心もとないことです。

(十二月十六日記す。)